

2013 年度（後期）指定公募①

「市民の集い（市民講座）開催への助成」

高齢者の一人暮らしを支える社会の在り方を探る

～孤独死・孤立死とは言わせない！

意思を貫く生き抜き方を考える～

公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団の助成による

最期まで自分らしく自宅で暮らそう会

福田 和子

2014 年 10 月 23 日提出

## 1. はじめに

後期高齢者と呼ばれる年齢になって今まで考えてもいなかった問題に直面しました。日本の現行の社会は「家族」又は「保証してくれる親族」がいることを前提として成立していることです。公営、私営住宅の入居、保険の加入、諸々の高齢者住宅への入居、医療施設への入院等々。社会生活における諸般の申請・手続きが「おひとりさま」ではほとんどの場合認められていません。このことから「おひとりさま」の生活の実態に対する認識も薄いのではないかと思わざるをえません。

2010年の国勢調査では、高齢者の一人暮らしは全国で16.4%、東京都で23.6%、現在ではもっと多いと思われます。対して、行政面での高齢者対策は財政面、要員面でも十分な対応が取れているとは言い難いし、地域でのコミュニティを強化することでカバーしようとしています。地域の中での「絆（善意）」はともすれば「上から目線」「思い込みの好意」の押し付けになりがちで、「見守り」はときには「監視」化する場合もあります。必要ではないと言うつもりはありませんが、善意からとはいえ、高齢者本人の意志とは別のところで「おひとりさま老人」対策が取られている様な気がします。

「自分の生活設計は自分で建てたい」し、「出来る限り自立して生活を愉しむ」ために、いずれは支援を必要とする時に「どのような支援がほしいか」。「思い込み」と「押し付け」ではなく、周囲が個人の意志をどこまで汲み上げた支援ができるか、支援の力をより有効に生かすためにも考え話し合いたいと思い、今回助成金申請をし、市民の視点での集いを複数回開催したいと考えました。

少子化、団塊世代の定年、増税、年金支給年齢の引き上げ、医療費の上昇等、高齢者層の生活環境は年々厳しくなっています。若年層においても定職に就けず、結婚ができない、結婚しても子どもを作る余裕がない、結果「家族」が増えない、将来「おひとりさま」になる場合もあり得ます。一人暮らしの高齢者の自立した生活とその支援について考えてみることは、未来の日本の医療・福祉にも必要なことだと考えます。

## 2. 3回の集いの要約

自分自身の生き方を見つめながら、参加者同志の交流の中から、一人でも生きやすい社会にするためには、何が必要だと考えるか、忌憚のない意見を述べ合い、医療・保険・福祉に携わる方々に提言できることを目指しました。医療や福祉はどちらかと言うと一方通行になりやすいかと思いますが、市民の考えや思いを知ってもらうことで双方向の心を通い合わせた社会の仕組みにしていきたいとの願いを持ちながら、少人数での話し合いを重ねました。

これまでの助成は在宅医療に関わる医療職・福祉職等のいわゆる専門職へが中心でしたが、今回初めて在宅介護を経験した一般市民が中心となった会へも助成していた

できました。一般市民が「最後まで自分らしく自宅で生活すること」を目的として役立ててほしいとの主旨で、学者へ流れてしまいがちな研究費を一般人が考えていること、要望していることに重点を置いた問題提起を取り上げて頂きました。

## **1 回目の集いの要約**

### 行政について

- ・行政は「地域とのつながり」「周囲の見守り」を強調し、一人暮らしを心配して(?) 頻繁に訪ねてくるが、時と場合によってはちょっと困惑。
- ・度の過ぎた干渉は煩わしいしウオッチされているようだ。
- ・行政の指導による地域のホットカフェ～生活上の諸々の問題をアドバイスするとうが、相談すると居合わせた人達から噂として広まるおそれもある。

### 問題となるのは

- ・つかず離れずの距離の取り方が難しい。
- ・いざという時、行政機関は「土・日・祝日は休日」「平日でも 9時から 17時」で役に立たない。
- ・行政より委託された場合でも、支援を必要とする高齢者の存在が個人情報守秘等の制約で確認できない。
- ・行政は常に後出し。
- ・国が本来すべきことを国がしない。
- ・自分の生活を自分たちで守る。

### 自分達のこれから

- ・自分がどう生きたいかを貫くにはそれなりの覚悟が必要。
- ・助けが必要な時は声を出す。
- ・「やってくれない」とぼやくのではなく勇気を出して声を上げる。
- ・何も言わないでただ助けを待つ姿勢では駄目。
- ・必要な時に必要なサポートだけが欲しい。  
→現在は自分では何でもできる。でも何かあった場合どうすればいいか?  
必要な助けはほしい、一人ではお金もおろせない、入院時の保証人もいる
- ・後見人を勧められている。  
→後見人制度にも問題が多い。だまされたり、中途半端で放り出されたりとの例もあり、安易には依頼できない。組織的に考えなければいけない。
- ・問題が起きた時、現実には手続きに時間がかかりすぎる。対応が手遅れになる場合もある。

### 1 回目の集いを終えての感想

「自分らしく生きよう」とする共通の意欲を強く感じました。出席者が、高齢者本人、介護経験者、訪問看護師、ケアマネジャーと多方面の当事者が集まって、その立

場立場からのご意見が伺えて参考になりました。今回は「おひとりさまの生き方」が主な論点になった様な感じでした。

## **2 回目の集いの要約**

### 行政に対して

- ・現在、行政も色々な政策を打ち出しているが、具体的な形が全く見えない。
- ・介護をしている時に感じたのは、介護と医療の連携が無い。支援が欲しい時でも、どこにどう連絡したらよいか、各々担当が分かれていて複雑で分かりにくい。
- ・支援する側に変った時、要介護の人の情報を知りたいと思ったが、区役所・地域包括センター・ケースワーカーとたらい回しされ、ケアマネジャーでやっとわかった。
- ・困りごとは起こってみなければ分からない。色々と支援機関があるが、支援機関の間での連携が欲しい。
- ・一本電話を受けて（相談を受けて）そこから必要な機関に連絡してくれるようなシステムが欲しい。手続きは後からでも良い。
- ・健康な普通人が行政を行うので、支援を必要とする人の事情（健康状態・病人を抱えた家族・高齢者）が分からない、実感できない。
- ・担当者が訪問してくれて、連絡書をポストに入れてあっても、家族が仕事をしている場合は昼間不在なので連絡が取りにくい。平日の面談は難しい。（地域によってばらつきが大きい）
- ・細かい規則の制約がありすぎる。
- ・法律で規則事項が多い。枠外はアディショナルタイム。
- ・行政は縦割り、しかも機関相互の連携がないので、一連の手続きに再三役所に行く事になるので、仕事を持っている人間には負担が大きい。
- ・行政から来る文書は、文章が複雑で固すぎるので理解しがたい。もっと易しい表現で活字のポイントを大きくできないか。
- ・視覚障がい者にも墨字で送られてくる。分からないまま DM 等に紛れてしまって再発行という事も多い。表記だけでも点字にして欲しいし、どういう書類か内容がわかれば尚良い。そうすれば読んで手続きを代行してもらおう事も出来る。
- ・行政は申請方式なので、情報が届かない人間や、役所まで行けない人間（多忙・高齢者など）にも不利。

### おひとりさまに何かあった時

- ・信頼できるプロ（介護士・看護師・ケアマネジャー等）の人を作っておく必要がある。
- ・緊急の場合ともすれば周囲の対応が（専門職の立場から）本人不在、本人の意志が無視される時がある。その様な時に自分の意見をはっきり伝えられるような関係を作っておく。

・誰かが発信したシグナルを一カ所で受け取めて、そこからフローチャート式に相応した個所に接続してくれるようなシステムがあれば良い。

・行政はいつも後出し、いろいろ積み重ねていって自分達から制度を変える様な行動を起こす必要がある。

## 2 回目の集いを終えての感想

このような会合に出席なさる方達だけに活発な討議が交わされました。今回は、行政（主に福祉関係）に対する指摘が多く、様々な事例が出されました。

## 3 回目の集いの要約

3 回目の集いは、会議室での少人数の 1 回 2 回の集まりを受けて、場所を変え研修室を借りての集いを企画し 30 名の参加者を迎えての会となりました。

起業を目指すナースたちも参加され、サービスを受ける立場、提供する立場の方々が共に語り合う事ができました。

・地域ボランティアセンター、地域包括支援センターに関して、問題があって相談に見えた方については、必要などころにつなげることはできるが、こちらから出かけるのは難しい。助けてほしいという要請があってもすぐ駆けつけられる体制にはないし、たらい回しにされるという現実はある。対象も決められた人に限られている。

・地域包括支援センターの役割が周知されているか疑問である。多種多様な利用者に対応した包括支援センターの情報を一つにまとめた「引出し」を用意しておく必要がある。

・要介護の人のサービスはあるが、現在介護サービスを受けていない一般人についての体制が欲しい。

（民生委員の立場から）

・今はなり手が少ない。あくまでボランティアで強制も無いので途中で辞める人も多い。

・民生委員は近くに住んでいるのが強みだが、すべての民生委員に期待するのは難しい。

・近所間での関係性が大切だし、民生委員=市民である。

・行政としても委員の役割は地域の要と言うようになってきているので、自覚も必要になってくると思う。

（高齢者の立場から）

・85 歳を過ぎて身体の衰えを感じている。年齢的なものによって来るものはその年齢になってみなければ分からない。いろいろ考えるよりも覚悟をもって一日一日を良く生きてゆくことが大切と思う。同世代の人間ばかりと付き合うのではなく、若い世代の話しも聞かなければいけない。外部との関係を断ち切ってはいけないと考えている。

(訪問看護を通して)

・介護・看護を越えて、人としての関係を築く事も必要ではないかと思う。いろいろ行政に働きかけつつ「行政はいつも後からついてくる」ので、まず自分達から動いて築いていきたい。

(家族の介護をするようになって考えた)

・仕事をしていると近所にどんな人が住んでいるか、何十年も住んでいるのにわかっていないことに気付いた。改めて近隣の人達と接触し地域の中でも活動を始めた。それも嬉しい事である。

(起業を目指すナースたち) ~起業してどんなことをしたいか？

・とっかかりの窓口として相談して頂ければ行政につなげていきたい。また、必要としている方のところへは自分からも出向いていきたい。そういうところを作りたい。

・多死社会の時代が来る。それに対応したい。高齢・多死と精神障がい者との二面に対応してゆきたい。

・制度の制約で「しぼり」が多く、やりたいことができない。地域の老人の日常生活(早朝の路地での植木の水やり等)を観察して、この生活を維持していきたいと強く思った。今まで見えていなかったもの(高齢者がスーパー等で買ったものを重そうに下げて歩く姿など)が見えてきた。起業の覚悟ができた。

・自分のコンセプトである「ゆりかごから墓場まで」障害者・高齢者など生活弱者をケアする組織を作りたい。

・今までの仕事のつながりを生かして民間アドバイザーとして起業したい。

(起業を目指すナースの話聞いて)

・嬉しく思った。ただ心配なのは、ボランティア感覚ではペイするかどうかである。サービスを受ける側としては、長く続けてほしい。採算を考えて企業として成り立って継続して欲しい。

・いざという時 SOS を言える人を(元気なうちに)見つけておくことが必要であると思う。連絡された人がどうつないでゆくか。お互いに言いたいことを言える様な関係を構築する事が大切。

(元介護家族)

・患者と家族は医師・看護師の一言で救われることも多い。改めて自分の最後は自分の意志でと思った。

(起業家ナースから)

・北欧における福祉は 24 時間 365 日、税金は高くても機能・対応している。日本の現況から見て日本の行政は絶対そうはならない。まず、地元から発信すること、今問題と言う事があれば、小さなグループでも発信していけると確信する。

・「行政が後からついてくる」ような活動を期待しています。

### 3. 3回の市民の集いを通しての感想

起業を志すナースの方々とも討議できて良かったと思いました。1回目・2回目の会合でサービスを受ける側で感じていたことがたくさん出てきましたが、同じ事をサービスする側でも感じていらっしゃるとわかって心強かったです。大変とは思いますが、活動が発展してゆけますように願っています。三回の集いが少しずつ煮詰まった話しになったような気がします。

### 4. 終わりに

自分自身の今後の生き方を見つめながら、おひとりさまでも生きやすい社会にするためには何が必要か？ 3回の集いで参加者同士の交流の中から、忌憚のない意見を述べ合う事ができました。さらに、サービスの提供側とも意見交換できたことで、医療や福祉に携わる方々と市民との双方向の思いを感じあえることができたと思います。

元気な時は自分の思うままに生活でき、具合が悪くなった時にはいつでも相談できる場所があり、医療や福祉が必要になった時には自分の意志を汲んだ対応をしてくれ、自分が納得できる選択肢を示してもらえる。おひとりさまにはそれ相応の覚悟も必要ですが、だからこそ主体的な生き方ができる社会にするために必要な事柄が少し見えてきたように感じます。行政だけに求めるのではなく、自分達で出来る事から動き始め、時に集いを開催しながら方向性を再確認しつつ、一步一步前進できれば良いかと思えます。

今回、必要な事柄は大方見えてきましたので、今後具体的にどう行動化するかを考えていく機会が持てたらと考えます。

超高齢社会に向けて、おひとりさまが増える現実が始まっています。一人一人が主体的医療の実現を意識し、それが叶うシステムを構築できたら、医療と福祉の狭間で苦しむ方々も救われるのではないかと思います。

今回3回にわたっての集いが実現できましたのも、呼びかけに応じて参加して下さった方々のご協力と勇美記念財団からの助成金あつてのことと、こころより感謝申し上げます。

(公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団の助成による)

# 市民の集い(語る会)開催のご案内

## 高齢者の一人暮らしを支える社会の在り方を探る



～孤独死・孤立死とは言わせない！  
意思を貫く生き抜き方を考える～

助成: 公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団

これからの自分の生き方に関心のある皆さん！現行の日本は社会生活における諸般の申請・手続が「お独りさま」ではほとんどの場合認められていません。「家族」または「保証してくれる親族」がいることを前提として成立しているからです。

「自分の生活設計は自分で建てたい」し「出来得る限り自立して愉しみたい」と思いませんか？いずれは支援を必要とする時に「思い込み」と「押し付け」ではない「どのような支援がほしいか」、周囲が個人の意思をどこまで汲み上げた支援ができるのか、支援の力をより有効に生かすためにも関心のある方々と、ざっくばらんに本音で語り合い考えたいと思います。是非お待ちしております。老いも若きも集まって共に話しましょう！

日時： 第1回 平成26年6月30日(月) 14時～16時

第2回 平成26年7月31日(木) 14時～16時

第3回 平成26年9月20日(土) 14時～16時

場所： 藤和高田馬場コープⅡ 研修室 (新宿区高田馬場4-9-11)

第3回のみ 中野サンプラザ8階研修室4 (中野区中野4-1-1)

JR 中野駅北口徒歩2分

定員： 各回10名程度

※どなたでも何回でも参加できます。



JR 山手線／東京メトロ東西線／西武線／「高田馬場」駅 早稲田口より徒歩2分

主催: 最期まで自分らしく自宅で暮らそう会 後援: 看護コンサルタント／在宅看護研究センター

★参加ご希望の方は、下記内容をご記入のうえ FAX 又は電話でお申し込み下さい。

お名前 : 第(1・2・3)回参加希望

ご住所 : ご連絡先:

<問合せ先> 看護コンサルタント 担当: 片岡・仲野

電話: 03-5386-2427 (月～金 9時～17時) FAX: 03-5386-0662 (24時間OK)